

安永露子百首

青井 史 選



安永露子

何もの声到るとも思はぬに星に向き北に向き耳冴ゆる

『魚愁』

つきぬけて虚しき空と思ふとき燃え殻のごとき雪が落ちくる

片あしをひきあげて眠らむとする禽の無明の時を思ひてゐたり

水曇る夕べの岸にひしひしと人が劫のごとき石積む

紫の葡萄を搬ぶ舟にして夜を風説のごとく発ちゆく

終るべき生命をもちてあかつきの漁夫も獲られし魚もかがやく

麦秋の村すぎしかばほのかなる火の匂ひする旅のはじめに

『草炎』

さるすべりたゆたふ枝の秀にさける朱見殺して夏すぎしかな

夕まぎれつつ母の詠が四方に散る残る辛夷の花の門より

母の遺骨もちて旅ゆくかすかなる母の韻きは風にまぎれず

ひとすぢのすずしき蒼とならむまで吹かれて居りぬ草の峠に

暗んじて短かき古詩を言ふいとま雲雀は騰る黒くますますに

ひとの世に混り来てなほうつくしき無紋の蝶が路次に入りゆく

『蝶紋』

かすかなる放心の声あげて咲く桔梗の青見つつ羞しも

明けがたの光り薄刃のごとく来る伸びつつ揃ふ雑草の上

塩の壺酢の甕或るはかなしみの瓶とし固く口結ふ厨

海紅豆咲きて散りゆくとめどなき世の累積も踏めばくれなる

『朱泥』

紺地金泥阿合一巻写したる穂先小さき光明のこる

喪乱さうらんことのほかなる白蛾さくもゐて白蛾さくもならざるもの見えてをり

鮎あせ食めばましてしのぼゆ襲その国の梟たける師しが裔えいを泣く川千鳥

日本に依り韻律に倚ることの命運めいんつひに月花を出でず

前の世あに生れて消けのこる存念ぞんねんのしきり撓たがみて春の蠟ろう螂

燭かのごとき胡椒こしょうを辻つじに売る声の光明くわうめい和讃わさん赤光せくわう和讃わさん

能登のうとうと哭なみき佐渡さつとと叫こゑびてこのくにの呼び名短みづかかく人を逐やひき

藍あいはわが想おもひの潮うしほさしのぼる月中げつちゆうの藍あいとふべくもなし

咲さきそめて日ひごと人世にんせいに馴染なじみゆく乱世らんせい乱菊らんきくただにけれなる

文芸ぶんぎは書かきてぞ卑ひし書かかずして想おもふ百語ひやくごに揺ゆれ立つ黄苳きすげ

かき消えて草くさほとときす枯かれしかば涸かわれたる土つちのほとり度つしむ

人ひとならず薔薇ばいばいは生きて冬ふゆの日ひにはや大おほいなる藤ふじをかくさず

雪ゆき積たみてふかく撓たがみしリラの枝えだ ああ祖国こくこくとふ遠国とんこくありし

逢あひにゆく思おもひはすであたたかく身の経たりさまも白しろき蒲か生ま野の

牛うしと馬うま世よのかたはらにたちつくし短みづかき冬ふゆの草くさはむが見みゆ

何なにくはぬ顔かほして坐まる元旦げんげつの慶うらも一尾いちびの胎はら子ごのまへ

身みふるひて全身ぜんしんの花はな落おしるる紅山こうざん茶花てんげに今日けふ近ちか寄よるな

『藍月』

『讚歌』

行きあはせ生れ合はせし宿命しよくめいも致いたしかたなく不知しじ火か前後

忘れられること百も承知じやうちにて郷里きやうり万ま朶だのやよひのさくら

白桃はくたうをほのかにかぎる子午線しごんせんの窪くぼみをいまの含か差さとして

またしても岸きの小草せうそうを揺りたててひと粒つぶだねの翡翠ひすいが飛とぶ

光量くわうりやうは誰たれのものともなき重おもきミモザ・アカシア両手りやうてに刺さる

ひとよぎり一節ひとよぎり切きとぞ歌うたひ来て冬ふゆの木賊もくそくがまたも伸のびゆく

再びは浮うかぶことなき石擲いしなげて水みづのほとりの身命みんめい軽かろし

夏なつの花石榴けしやう小こさし地ちの上に花はなも一ひと顆こを夢ゆめみては落おつ

風土ふうど記逸文きいつぶんその火知ひちらずと書かきのこす声こゑの無名むななも夜半よはんの不知しじ火

雨あめやがて雪ゆきとなる夜よの白童子しろわらし老おいいて眠ねりの浅あさあさの父ちち

月つきひとつ草くさを離はなれて昇ありゆく打うつ手てあらねば靡ぢけ茅ちや萱げんも

『くれなるあぞよし』

十億じゆいの民たみしづかなる国くにに来て音ねせぬ靴くつを穿きく冬ふゆの旅

風かぜのなかに漢魏かんゑい風骨ふうこつ居いすわると長城ちやうせい万里ばんりゆけば寒ふしも

乱調らんてうといふ方かたあり一本いっぽんの銀杏ぎんぎやうが振うる鬱金うつこんの落葉らくえつ

かきわけて来るくるかもしれぬ神かみを待まちつ立野たての国くに見みは冬ふゆの勁草つよくさ

盛衰せいすいのなかなる衰すいのうつくしく岸きに枯かれゆくくれなるぞ霞よ

『水の門』

その象在りとも見えぬ宙天に悲喜をわかたぬ春鳥の声

万世を生くるにあらず一世の中のひと日の緋いろの牡丹

立ちそよぐ草に混りて今年また一夏不犯の木賊伸びゆく

北に飛ぶ風のゆくへも難波潟近代暗き草が採みあふ

八重樞の紅ほたたと散りしけば人世きながら朽ちゆくことし

降る雨にくまなく濡るる世と言へど蓮田の蓮は言絶ちて伸ぶ

手を打てば遠き過去世を起ちて来る風に吹かれて騒ぐ高萱

さががけはむしろ淋しく一粒の雨額髪に受けとめてゆく

萱草の彼方流るる夏の川見えぬ仏が矢のごとくゆく

北指せば風に夷狄のころざし利根の川波とどろきて越ゆ

水浅き沼のやさしさみづからの影もろともに皷あそぶなり

いかやうに生きて渡るも身ひとつの世にして軽し石橋の上

かららかに驢馬が曳きゆく空ぐるまトルファントルファンの葱ひとすぢのせて

ひと粒の葡萄をはめばはしけやしこの惑星の胸乳したたる

砂のほか何も見えねばゴビ砂漠ころづくしの蜃気楼立つ

神の声言ふべく深き沈黙に入りたる石に午後の日が照る

『閑吟の柳』

『冬麗』

全身に月の光を浴むなればあはれ青砥となりゆく背

しろがねの月を抱きて眠りこむ江津の湖面を何もて擲たむ

ゆらゆらに月壺ひとつを呼ぶべしや湖をあまりて湧く水の音

沈黙を終の愉楽として佇り庭ごとごとく立冬樹木

双手もて一つに掬ぶ春の水あはれ掌中の湖かきらめく

父逝けりきはあれ九十九歳の紺の浴衣のなほ男なれ

九十九年在りて逝きたる父なれば打ち返しこよ礫九十九

嘴赤く生れ落ちたる鶴の子が悪声音も知らず生ひゆく

川辛子摘みて送らむ人の名を恋ひつともとなわが世も過ぎむ

耳の辺に来つつ遠ぞく鬼やんま一生見戯と言ひしか否か

ながらへし委細白紙に返すとも百塵の鳥わが上を翔ぶ

父を追はず母も忘れて湖岸の鷺と相向く鷺も然りか

音もなく鳥の軍団空をゆく暁けの涙の身に満つるころ

生きて在るも死して消ゆくもひとつ闇額うつばかり螢飛ぶなり

暗紅の花それとなく触れて来る山萩我の齢を知るか

逃亡の心重ねて七月の歳時琴座の一つも見えぬ

『青湖』

『紅天』

身を捨てて啼かねばならぬ思ひざし夏の草生を出づる野ひばり

背のびして野兔が見てゐるすすき原本朝一の盗とは誰か

降る雪に一つ開きし山椿千の激語のはじめ小さし

積むほどもなき泡雪に肌濡れて博多駅頭含差列車

紫木蓮うらの裏まで紫の花鳥風月軽からなくに

海に浮く火皿一枚九州と呼べば雨中に立つ山煙

海岸の菜の花畑風吹けば身ぐるみ脱いで黄の蝶が翔ぶ

ひそかなる胸乳も濡れて襲の国の朝霧少女自転車を駆る

一行の遺書も無かりし父の声いまか虚空に咲く紫木蓮

『流花伝』

億年の時の流れのどのあたり赤き椿の花を拾ふは

雨降れば痛む左腕よ残敵の一人養ふごとく生き来し

冬天に残る柘榴のひとつのみ瑕瑾だらけといふが愛しも

わらすほとよぶ魚ありき一管の笛のごときが干潟に哭けり

かくありてやがて無音の感星となる日思へば風迅きかな

誰の手が触れて咲きたる冬の花紅山茶花に悔なかるべし

そのむかしそのむかしとぞ言ひ捨てて砂をますますに來るかぶと蟹

赤とんぼ海に出でてでも赤とんぼ四郎時貞未だ帰らぬ

哭くこともなかりし世ぞと言ひ捨ててまた満身の創深くする

歌の表記・ふりがなは原則として歌集に準拠しています。

『緋の鳥』

安永路子は一九二〇年熊本市に生れる。十年程前江津湖の

辺りに居を移されているが、この地と同じ熊本市内。生地を
こよなく愛する作家である。また書家としても著名。

安永が歌壇に衝撃的に登場したのは昭和三十一年。「短歌」
に三十首を発表、さらに「新鋭百人集」に参加し、同年に

「棕櫚の花」五十首で角川短歌賞を受賞している。以後氏は、
時代の先鋒として歩いて来られた。そして特徴的なことは最

初から文体が完成されていたこと。その背景には「椎の木」

の主宰、父・信一郎の存在もあつたと思われる。

ところで安永の作品には、孤独感と我にとつてこの世とは
何かという問いかけが常にある。ことに第一歌集『魚愁』か
ら第三歌集『蝶紋』あたりまではこの世は濁世という思いが
強い。安永の感性の源が知らされる。しかし、最新歌集『緋
の鳥』ではこの世を生きる自身を緋の鳥だと言っている。こ
の妖艶な変身は私たちにとつて極めて挑発的である。

青井 史（あおい・ふみ）「かりうと」主宰